

詮事哉、此鳥の病ひ、口に白キ粉のよぶなる物付たらば、早く用心して療治すべし、小キ鳥には病ひ多發るもの、兼而氣を付可、飼事、寛政年中、本郷邊にて子出來候事も有り、此鳥至而寒にまけ候間、夫故時トは秋する也、但春巢より秋の巢子出來候鳥也、第一弱キ鳥にて六ヶ敷もの也、

〔飼鳥必用〕下岩雀。

此鳥春秋、日光ち、ぶより出る鳥也、雌雄よくわかるなり、荒鳥は荏胡麻にして、後摺餌につける也、

石殘雀セキザン

此鳥石殘雀として上方より來る事有、尤唐方とてもなし、和鳥にも澤山なし、形大ましこに似て、頭を總羽上への照りましこの如く、背黄色足は黒し、雌は青し、時して何れも青くなる、飼方ゑごまにて、後すりゑにつけるなり、

〔玉勝間三〕にふなひといふ雀

尾張國人のいはく、尾張美濃などに、秋のころ、田面へ廿三十ばかりづゝ、いくむれもむれ來つゝ、稻をはむにふなひといふ小鳥あり、すゝめの一くさにて、よのつねの雀よりは、すこしちひさくて、背の下に、いさゝか白き毛あり、百姓はこれをいたくにくみて、又ニにふなひめが來つるはとて、見つくればおひやる也、此すゝめ春夏のほどは、あし原に在て、よしはらすゝめともいふといへり、のりながこれを聞て思ふに、入内雀ウチノイヌヅクといふ名、實方、中將のふる事にいへる、中昔の書に見えたり、されどそれは附會説にて、にふなひは、新嘗ニホトメといふことなるべし、新稻ニホトメを、人より先に、まづはむをもて、まか名づけたるなるべし、萬葉の東歌にも、新嘗をにふなみといへり、又おもふに、稻負鳥イナオホセドリといふも、もし此にふなひの事にはあらざるにや、古き歌どもによめる、いなおほせ鳥のやう、よくこれにかなひて聞ゆること多し、雀はかしかましく鳴物也、庭たゝきは、かなへりとも聞えず、